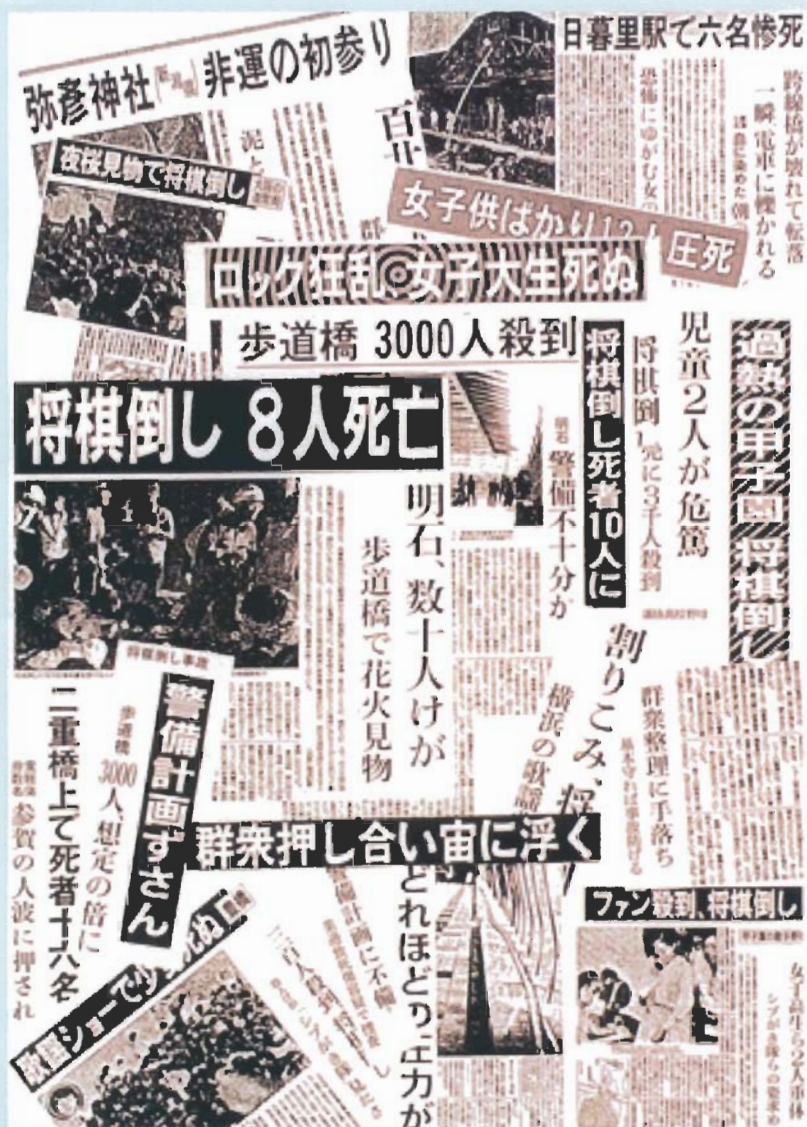


第1章
雑踏の脅威

過去の雑踏事故の数々 ……



朝日新聞・毎日新聞・読売新聞

雑踏から生じる破壊力

● 跨線橋の板壁破損（国電日暮里駅）

昭和27年6月18日午前7時45分ごろ、国電日暮里駅構内で常磐線から降りた乗客が京浜線ホームに乗り換えようとして四番線ホームから十番線ホームにかかっている跨線橋を渡っていた際ラッシュアワーで揉み合い、十番線側突き当たりの跨線橋の板壁が押し破られ十数名が9メートルの高さから線路上に転落した。折から京浜線浦和行電車が滑り込んで来たが、急カーブのため見通しが効かず、一瞬間に転落した人を轢き、死者6人、負傷者7人を出した。

（朝日新聞 昭和27年6月18日）

● 玉垣を壊し折り重なるように崩れ落ちた人の山は2m（弥彦神社）

昭和31年1月1日午前0時20分ごろ、境内は約3万人の初参りの参拝者で賑わっていた。押し合い揉み合いひしめき合っている拝殿前広場の人波目掛け、広場入口の随神門の両脇に設けられた櫓から、今年を祝う福餅投げが始まった。

・
・
・

あっという間に二、三百人が将棋倒しに、また石段の上からは玉垣を崩して二メートル半下に雪崩落ち折り重なってしまった。

下敷きとなった124人が圧死、負傷者94人（うち重傷8人）を出す惨事となり、事故はわずか5分間の出来事だった。

目撃者の話「転がりあってできた人間の山の高さは2メートル以上もあった。その底の方の人が死んだ」（朝日新聞 昭和31年1月3日）

● 群集の重みで歩道橋手すりが湾曲（明石市 朝霧歩道橋）

平成13年7月21日、兵庫県明石市大蔵海岸において明石市民夏まつり花火大会が開催された際、最寄り駅であるJR朝霧駅から大蔵海岸への通路となった朝霧歩道橋南端付近において、会場に向かう観衆と帰宅しようとする観衆が極度に集中し、同日午後8時40分ないし50分ごろ、強度の群集圧力が生じて多数の人が折り重なって転倒したことから、死者11人、負傷者229人を伴う雑踏事故が生じた。

分析の結果、「事故現場付近は1平方メートルでの人数が13人に達したのではないかと指摘している。

手すりはステンレスパイプを鉄板製の腕で支えており、歩道橋の両側にある。

ゆがみは二段階になっており、歩道橋北半分5メートルでは斜め下方向へ数ミリ張り出しているだけだが、南端部5メートルでは外側へ約6センチ、下へも約2センチ動いている。

南端部5メートルは波打たずに平行移動しているのも特徴である。

手すりは1メートルあたり85～140キロの力がかかると曲がるという。その圧力も二段階でかかったのではないかと分析。

まず転倒直前の押し合い状態で数ミリの歪みが生じ、続く転倒により特に密集度が高い南端部5メートルが大きく動いたと見ている。

（神戸新聞 平成14年8月1日）

事故に遭遇した人々の証言

明石市民夏まつり雑踏事故

人の重みと圧力で息ができなくなり、目の前が真っ暗になり数秒であると思うが気を失った。何人もの人が倒れ、覆い被さってきて、周りの人達も体が半分以上埋まっていて、誰一人動けず、子供を引っ張り出そうにも身動きもできず、下半身は痺れて感覚を失い動けなく、どうしようもなく、子供がいることを叫び救助を待った。

男性32歳(当時)

アクリル板と男性の間に挟まれお腹が潰されそうになり死ぬかと思った。周りでは、人が押しつぶされ子供ばかり6~7人が山積みになっていた。

女性34歳(当時)

全く身動きのできない状態で、方々から怒鳴り声や子供達の泣き声が聞こえていた。駅へ戻れという声と海岸へ戻れという声で騒然としていた。自分の子供の姿が見えなくなり、低い位置を探そうとしても屈むこともできなかった。

女性35歳(当時)

人波で左右に押されて娘は挟まれる度に“グエー”と呻きながら何度も白目を剥き、気を失い、すぐ後ろは楕円形に将棋倒しが起きていた。倒れた人に片足を抱きつかれ、何度も倒れた人を踏んでしまっていた。そうしなければ立っていられなかった。

女性30歳(当時)

人混みに押され、体が宙に浮き、息苦しくなり、胸と左足に痛みを感じた。自分の身を守るのに精一杯であった。

女性72歳(当時)

駅側から急に押され、海側からも押されて胸が圧迫され息ができなくなりになった。一瞬ゆるんだかと思ったら、また、ぐっと押される状態が繰り返あり、このままでは死んでしまうと思った。

女性46歳(当時)

超満員の電車のような状況のなかで、乳母車が人の波に押されてきしみだした。背の低い子供は人の間で息苦しくなり泣きわめいたりした。大人でも息苦しくなり天井を向いて喘いだりしていた。大人達が歩道橋の側壁に手をつき人のトンネルを造り、子供達を必死で守っていた。怒号や助けを求める声などで地獄のようだった。

女性64歳(当時)

締め上げられるようになり体が宙に浮いて死ぬと思った瞬間気を失った。自分も死んでもおかしくない状態だった。

男性44歳(当時)

あちこちで子供をかばう親の声が飛び交い、「子供が死んでしまう」「子供だけでも助けて」との叫び声……。

女性33歳(当時)

(第32回明石市民夏まつりにおける花火大会事故調査報告書より一部抜粋)

弥彦神社雑踏事故

単純に、みんな転んだから死んだというのではなく、立ったまま呼吸が出来なくなって死んだ人もいた。泣き叫ぶ人はいい方で、声も出ないほどの惨事だった。

男性23歳(当時)

こら大変なことになった。どうしようかと……。一時ぼう然となった。

男性34歳(当時)

(毎日放送 平成14年5月1日)

二重橋雑踏事故

二重橋近くまで来ると人波でどうにも動きがとれなくなってどっと倒れ、家族とも下敷きとなった。「父さん死にそうだ」という声を聞いたまま私も気絶してしまった。

男性

二重橋を渡ろうとしたところ人混みが激しくなって、前と後ろから押す人の力で体が浮き上がり、傍にいた姉に「足が離れても倒れない」と言った瞬間、そのままなぎ倒されるように数人の大人の下敷きとなってしまった。

女性

(朝日新聞 昭和29年1月3日)